

平成29年度

ラインジャッジ マニュアル

平成29年3月19日発行

JVA国内事業本部

審判規則委員会 指導部

『ラインジャッジの責務』

1. 試合前

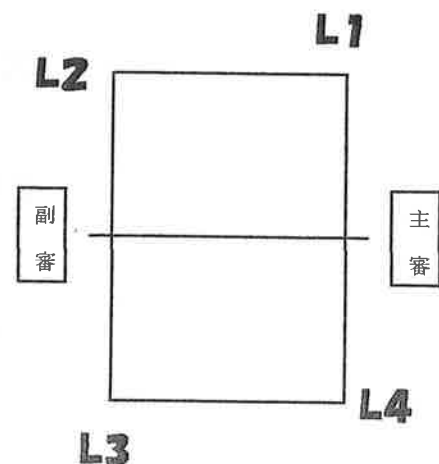
- (1) 試合開始1時間30分前までには、競技場に集合すること。
- (2) 競技場に集合したら、コート等の設営や試合に必要な用具等のチェックを積極的に協力すること。
- (3) 試合60分前にレフェリーミーティングが行われるので、主審、副審、記録員、アシスタントスコアラー、ボールリトリバー、モッパーと綿密に打ち合わせを行うこと。
- (4) レフェリーミーティングには、審判服で参加すること。胸には自分の公認された資格のワッペンを付けること。
- (5) レフェリーミーティングの前にラインジャッジは、誰がどのラインを担当するのか、また試合中のいろいろと起こるケースに対してどのような動き方をしたらいいのか、どのようにお互いに協力をしていくのかを事前に打ち合わせしておくこと。特に、主審に見えにくい所や、アンテナ外通過、フライングレシーブで床にボールが落ちたかどうか、ブロッカーやレシーバーのボールコンタクトがあった際の出し方等をよく打ち合わせておくことよい。
- (6) フラッグの点検をする。
- (7) 試合開始30分前には、記録席後方に集合すること。
- (8) 公式ウォームアップ中、担当ラインの延長線上で、目慣らしをするとよい。
- (9) 公式ウォームアップが終了したら、担当の位置につき、ネットやアンテナが正しい位置に取りつけているかどうかチェックする。特にアンテナの取り付け位置については、ゲーム中でも十分注意する。

2. 試合中

(1) ラインジャッジの位置

- ① 自分の担当するラインの想像延長線上でコートの各コーナーから2m離れ、ラインを身体を中心に置き、視線はライン上に置くようにしてフリーゾーン内に立つ。エンドラインはライトサイドのコーナーから「L2」・「L4」が、サイドラインはレフトサイドのコーナーから「L1」・「L3」が統御する。(図1)

《図1》



- ② レフトサイドからのサービスの時は、サーバーの妨害にならないように、サイドラインの延長線上、サーバーの後方に移動し位置する。その際、サーバーのフットフォルトの有無に注意するため、横には開かない。

(2) ラインジャッジのフラッグシグナル

- ① 起きた反則を確実に判定し、速やかにフラッグシグナルを示す。主審は、そのシグナルを確認して最終判定を示す。
- ② フラッグのポールに人差し指を添えてポールを握り、ひじが曲がらないようにまっすぐにフラッグを出す。まず構えた姿勢で判定を行い、すばやく姿勢を正してフラッグシグナルを示す。
- ③ 姿勢については、アウトオブプレー時は自然体でリラックスして立つ。また、サーバーがボールを打ってからは、移動しやすい低い姿勢をとり、目の位置を下げ、身体（腰）でボールを追う。目の位置が高いとボールを上から見ることになり、ボールと床の接点が死角となり、ボールがラインにふれているか明瞭に判定できない。低い姿勢が必要なときとそうでないときの区別をつける。サーバーがエンドライン後方から打つ時は、サーバー側のエンドライン担当のラインジャッジは、低い姿勢をとる必要はない。
- ④ フラッグシグナル（ボールイン、ボールアウト、ボールコンタクト、サーバーのフットフォールト等）のみ使用し、それをしばらくの間続けなければならない。
- ⑤ フラッグシグナルを出す場合（ライン判定をしっかりとってから）、身体とフラッグはラインに向け、顔だけを主審の方に向けて目をあわせ判定を伝えることが、お互いの信頼関係を保つ上でも非常に大切である。

3. 試合後

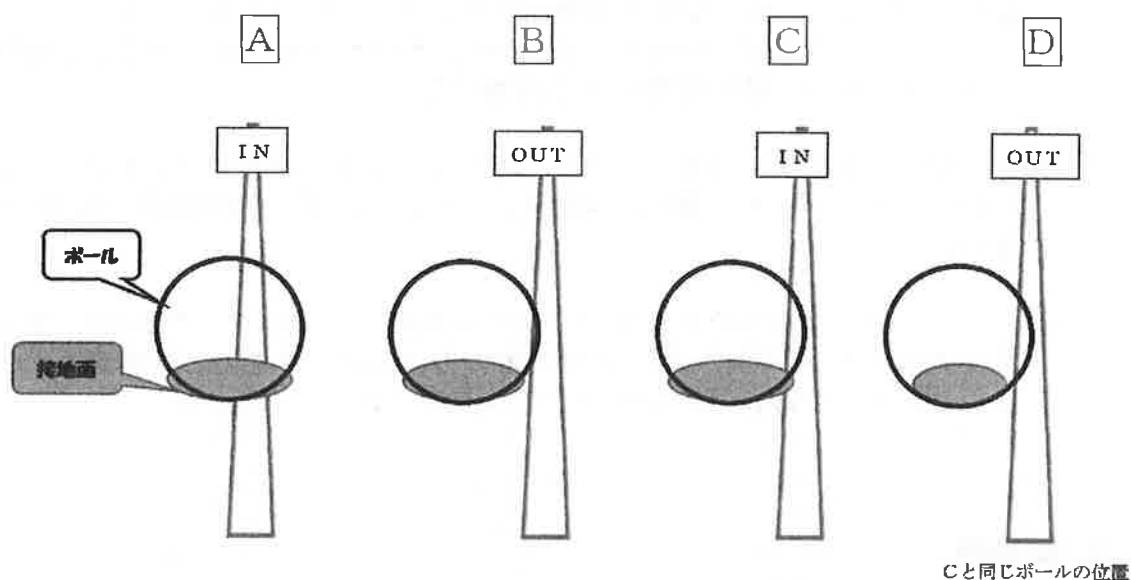
- (1) 試合が終了したら、記録席の後方に集合し、主審、副審、記録員、アシスタントスコアラーと握手をする。
- (2) レフェリールームで主審・副審からアドバイスを受けると良い。
- (3) 審判委員長より試合全体を通してのラインジャッジの任務についてアドバイスを受けること。
- (4) 最後にお互いにディスカッションをすること。

『ラインジャッジの判定の仕方』

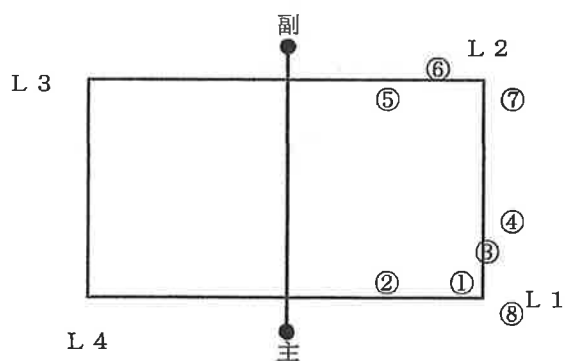
1. ラインに関する判定(ボールイン、ボールアウト)

- (1) ボールがライン付近に落下した場合は、そのラインを担当するラインジャッジだけがシグナルを出す。(1人1線が原則で「ボールイン」はライン2m以内とする)《下図2参照》。各コーナーのコートに落ちた場合は2人のラインジャッジがシグナルを出す。《下図3参照》
- (2) ボールがインか、アウトかボールコンタクトかの判定は、速やかにシグナルを示さなければならないので、判定は躊躇してはいけない。シグナルが遅れると選手がアピールをする原因となる。
- (3) イン、アウトの判定は、最初はボールを見て、ボールが床近くにきたらボールから目を離し、ラインを見て判定をする。

《図2》『ボールと床の接点』 ※ラインの右側がコート



《図3》『コーナーのボールイン、ボールアウトの判定』

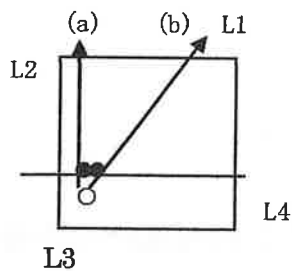


- | | |
|------|----------------------------|
| ボール① | L 1, L 2 が判定 (コーナー 2 m 以内) |
| ボール② | L 1 が判定 |
| ボール③ | L 2 が判定 |
| ボール④ | L 2 が判定 |
| ボール⑤ | L 3 が判定 |
| ボール⑥ | L 3 が判定 |
| ボール⑦ | L 2 が判定 |
| ボール⑧ | L 1, L 2 が判定 |

2. ボールコンタクトの判定

- (1) ボールコンタクトを認めた場合は、フラッグを**あごの下**でやや高めに旗を立てて旗の先を別の手で触れる。スパイクボールがコート内に落ちた場合は、ボールインのフラッグシグナルを出す。
- (2) ラインジャッジの任務は、まずライン判定である。ブロックのボールコンタクトに集中しすぎることなく、ボールより先にラインに目をやり、正確に担当ラインの判定を行う。
- (3) レシーバーにボールが触れコート外に出た場合は、レシービングサイドのラインジャッジのみがボールコンタクトを示す。
- (4) ボールがブロッカーに触れコート外に出たことが明らかな場合は、レシービングサイドのラインジャッジと担当ラインのラインジャッジのみがボールコンタクトを示す。またスライスタッチでブロッカーにボールが触れコート外に出た場合は、ボールのコースによって、下記の要領で担当ラインジャッジがフラッグシグナルを示す。

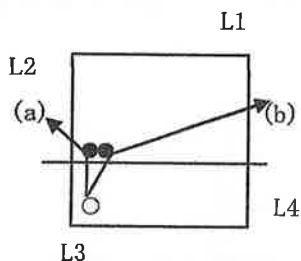
① ボールがブロッカーに触れてエンドライン外後方に出た場合



(a) L1, L2, L3がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(b) L1, L2, L3がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

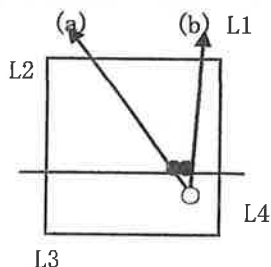
② ボールがブロッカーに触れてサイドライン外後方に出た場合



(a) L1, L2, L3がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(b) L1, L2, L3がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

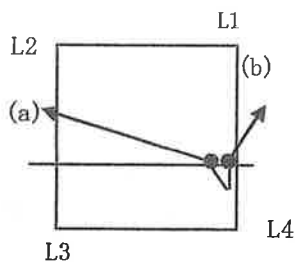
③ ボールがブロッカーに触れてエンドライン外後方に出た場合



(a) L1, L2, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(b) L1, L2, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

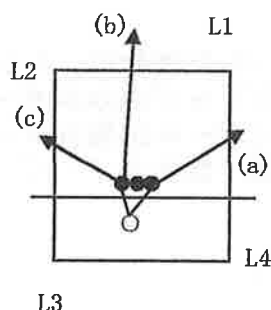
- ④ ボールがブロッカーに触れてサイドライン外後方に出た場合



(a) L1, L2, L3, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(b) L1, L2, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

- ⑤ コート中央からのボールがブロッカーに触れてコート外に出た場合



(a) L1, L2, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(b) L1, L2, L3, L4がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

(c) L1, L2, L3がボールコンタクトのフラッグシグナルを示す。

3. ボールが床に触れたかどうかの判定

- (1) パンケーキのプレーで、自コートの床にボールが触れたことが確認できた場合は、ラインジャッジがシグナルを示す。
- (2) フラッグシグナルは、ボールインのフラッグシグナルではなく、身体の斜め前で、2・3回床をたたくシグナルで示す。

4. サーバーのフットフォルトの判定

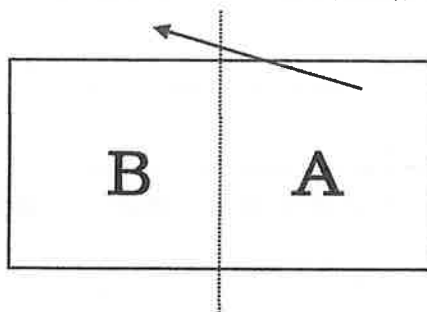
- (1) サーブを打つ瞬間の足の位置、及びジャンプサーブなどで踏切る足の位置がサービスゾーン外やコート内であれば反則となる。その判定はエンドライン担当のラインジャッジが判定しサイドライン側であれば、サイドライン担当のラインジャッジが判定をする。
- (2) フラッグシグナルは、頭上で旗を左右に1往復振り、片方の手でラインを指す。

5. アンテナ付近を通過したボールの判定

アンテナ付近をボールが通過する場合は、そのコースに対応するラインジャッジが、判定をするのが望ましい。その際、自分が担当するラインの判定に支障のない範囲（1，2歩）で動いて、ボールとアンテナの位置を確認し判定を行う。

(1) 許容空間外（アンテナの外側または上方）を通過した場合

① ボールがフリーゾーンやフリーゾーン外に落ちたとき。



a : チームの1回目・2回目の接触後の場合

主審：落ちた瞬間に吹笛をする。

副審：吹笛をしない。

ラインジャッジ：落ちた瞬間に「アウト」を示す

b : チームの3回目の接触後および9人制の場合

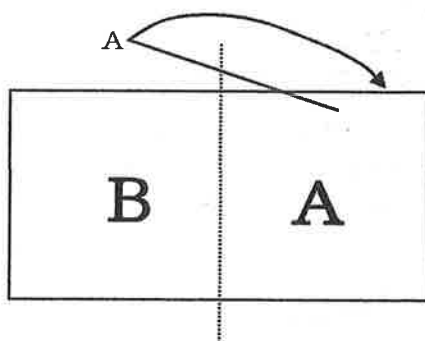
主審：ネットの垂直面を通過した瞬間に吹笛をする。

副審： //

ラインジャッジ：ネットの垂直面を通過した瞬間に「アウト」を示す

② Aの選手がボールに触れたとき。

a : 許容空間外を通過してボールを取り戻したとき

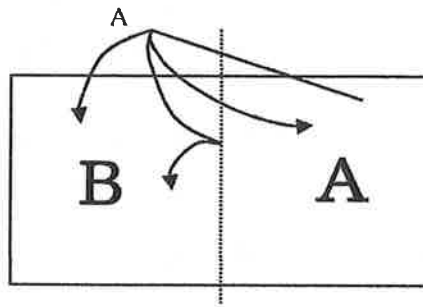


主審：吹笛をしないでラリーを続行する。

副審： //

ラインジャッジ：フラッグシグナルは示さない。

b : ボールが許容空間内を通過したとき。また、ボールがアンテナの内側のネットに触れたり、床に触れたとき。



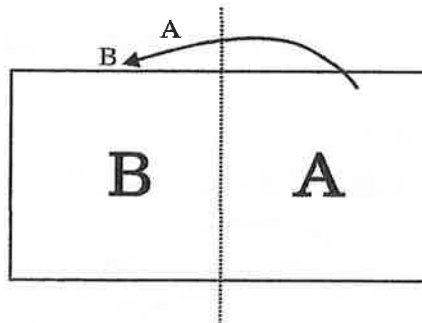
主審：サイドライン上を完全に通過した瞬間に吹笛をする。

副審： ”

ラインジャッジ：サイドライン上を完全に通過した瞬間にフラッグを振る。
(一往復)

③ ボールがアンテナの真上や外側を通過してBチームの選手に触れたとき。

a : Aチームの選手がボールを追いかけている場合、Bチームの選手のインターフェアとなる。

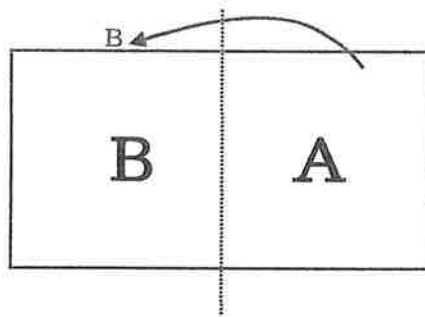


主審：Bチームの選手がボールに触れた瞬間に吹笛をする。

副審：吹笛をしない。

ラインジャッジ：Bチームの選手がボールに触れた瞬間にフラッグを振る。
(一往復)

b : Aチームの選手がボールを追いかけていない場合

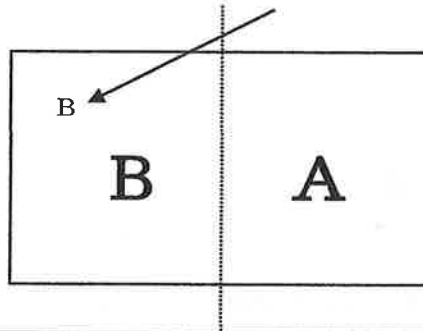


主審 : Bチームの選手がボールに触れた瞬間に吹笛をして、Aチームのアンテナ外通過でボールアウト。

副審 : //

ラインジャッジ : フラッグを振る。(一往復)

(2) Aチームのフリーゾーンから許容空間外 (アンテナ上方を含む) を通って Bチームのコートに向かっていく場合。

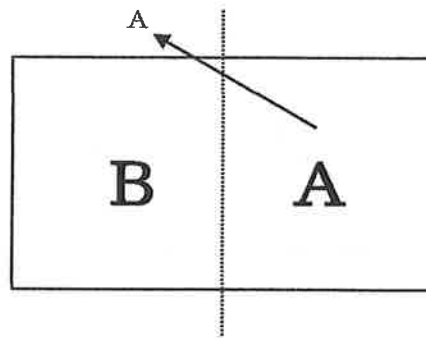


主審 : ネットの垂直面を通過した瞬間に吹笛をする。

副審 : //

ラインジャッジ : ネットの垂直面を通過した瞬間に「アウト」を示すか場合によっては、フラッグを振る。

- (3) Aチームのコートから許容空間を通過してBチームのフリーゾーンに向かって行く場合。



a : Aチームの選手がボールに触れたとき。

主審 : 触れた瞬間に吹笛する。

副審 : //

ラインジャッジ : 触れた瞬間にそのコースのラインジャッジがフラッグを振る。(一往復)

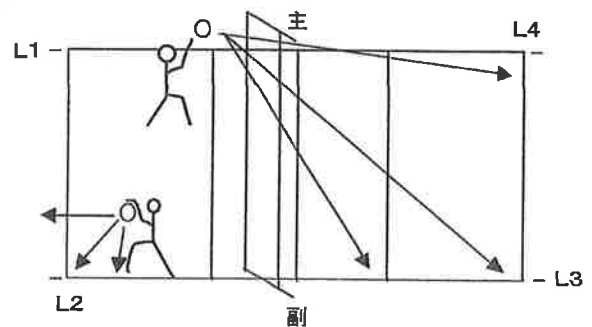
6. トレーニングマニュアル

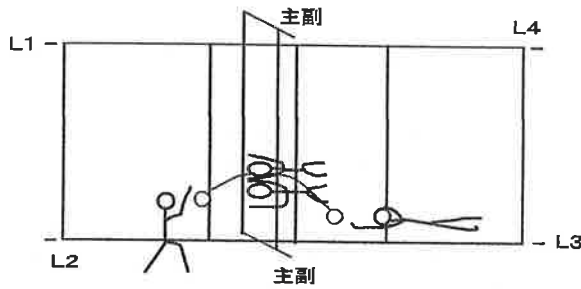
(1) レシーブボールが床に触れたかどうか

- ① 主審・副審のアシストをしなければいけないので、低い姿勢でボールと床面との接点を見る。ボールが床面に触れた瞬間にフラッグシグナルを出す。
- ② タイミングが遅れ躊躇すると、選手のアピールのもとになるので十分注意すること。

★ライン判定

- a サイド、エンドラインにぎりぎりに打つ
- b コーナー(1M 以内) に打つ
- c 選手でボールが見えない時の判定



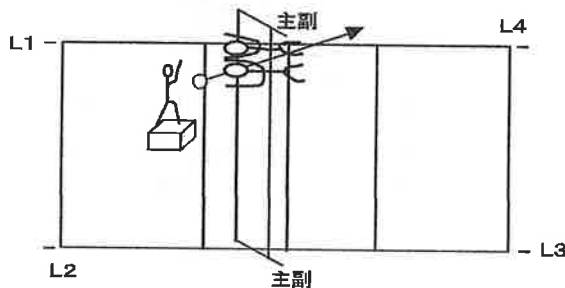


★床に落ちたボールの判定

- a フェイントボール・tip playをフライングレシーブで手の甲でボールを上げる。
- b ブロックカバーのプレイヤーの陰になってプレーが見えないケース。

(2) アンテナ付近をボールが通過する場合について

- ① 確認できたラインジャッジのみがシグナルを出す。
- ② ネット幅1mの間のアンテナに当たった時は、一番見やすい位置にいるラインジャッジが判定すべきである。

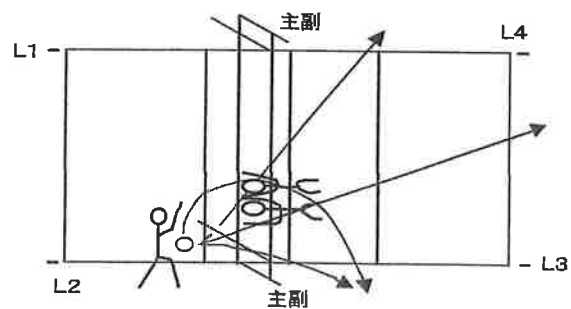


- ★ボールがアンテナに当たるケース
- ★ブロッカーがアンテナに触れるケース

- a 台上よりスパイクを打つ。
- b アンテナぎりぎりに打つ。
- c アンテナ外を通過するボールを取り戻すケース

★アンテナ外通過ボールを色々な角度から取り戻す。

★ボールの角度によって、どのラインジャッジがライン判定をおろそかにしないで、どのように動いたらいいのかを確認する。



※ ラインジャッジの動きに十分注意すること。ボールのコースに入るために、極端に動いてライン判定がおろそかになったり、またコースに入らないで判定すると不信感をもたれるので動く範囲を十分に確認する必要がある。

※ 取り戻されたボールが許容空間内を通過した場合は、フラッグを左右に振る。

(3) ブロッカーとレシーバーのボールコンタクトについて

- ① 特にブロッカーの上（指）をかすっていくケースや左右をかすっていくケースは、主審・副審からは非常に見にくいケースもあるので、原則的にはレシーブ側の2人のラインジャッジがフラッグシグナルを送る。しかし4人のラインジャッジが明らかにボールコンタクトを確認できた場合は確認したラインジャッジが、ボールコンタクトのフラッグシグナルを送る。
- ② アンテナ付近、特に副審側でのアタッカーが意識してタッチアウトを狙うプレーのブロックのボールコンタクトはしっかりと見る。
- ③ スパイカーがボールをスパイクして、ブロックにはねかえったボールが、そのスパイカーに当たった場合
 - ・特に主審側で起こるケースは、主審の死角になるケースが多いので担当のラインジャッジはしっかりと見ること。

★ブロッカーとレシーバーの
ボールコンタクト

- a 台上よりスパイクを打つ。
- b ボールがブロックの上をかすめるケースと左右をかすめるケース。
- c ライン際のレシーバーのボールコンタクトも主審の死角になるケースがあるので、ライン判定も十分注意しながら、視野に入れてみる大切である。

